

中古文学会関西西部会会報

第二十三号
令和八年三月

第七十回例会発表要旨

伝後水尾天皇筆大和物語切の本文について

『源氏物語』における「大殿」―「おとど」との比較をとおして―

第七十一回例会発表要旨

私家集としての西本願寺本『在原業平朝臣集』

『落窪物語』の〈あこき〉と『鶯鷺伝』の〈紅娘〉

―侍女の活躍と継娘の復権に関する比較文学的考察―

『大和物語』の親と子

第七十二回例会発表要旨

『源氏小鏡』は『源氏物語』をどのように読んだか

―語り手の言葉から見ると―

『海人の刈藻』巻四を読む―二人の新中納言を中心に―

大沢本『源氏物語』（個人蔵）の成立過程

中古文学会関西西部会例会記録

中古文学会関西西部会規約

梶谷 侑希	2
飯田 実花	3
荒井 洋樹	4
三木 雅博	5
山本 登朗	6
酒瀬川なおみ	7
釜丸 祥	8
瀧山 嵐	9
	10
	15

伝後水尾天皇筆大和物語切の 本文について

関西大学（院）

梶 谷 侑 希

現存数の少ない『大和物語』の古筆切の中で、伝承筆者を後水尾天皇とする『大和物語』の切を集め、見える範囲で形態面と、本文異同の面から本文について再検討した。

形態面は、百三段の内容が窺える一葉と、八段後半と九段前半の内容が窺える一葉の計二葉を元に考察した。百三段の内容が窺える切は、脱文がある。その脱文は、行飛ばしが故の脱文であることが、北村季吟『大和物語抄』と永青文庫本から考えることができた。さらに、脱文の前の本文に異同があり、当該切と永青文庫本が一致している。また、八段後半と九段前半の内容が窺える切は、朱の書入れがある。その書入れは、別筆であり、元

の書写時にはない一文であったと考えられる。この一文が親本の段階で有していないことを永青文庫本と桂宮本から窺うことができた。

次に、本文異同は、十四本の諸本を確認し、当該切と近い本文を導き出した。誤字や誤写の可能性が残る中、永青文庫本と近いことが見えた。しかし、永青文庫本と対立する本文も少なからずあり、どこかの段階で他の諸本と接触していたと考える。

これらを踏まえて、当該切の本文は、永青文庫を基盤として、他の伝本と接触していると考え、桂宮本系統に属するものであると結論付けた。しかし、どの伝本と接触したのかについては今後の課題としたい。

『源氏物語』における「大殿」

—「おとど」との比較をとおして—

大阪大学（院）

飯田実花

「大殿」は、辞書等では大臣を指す語として説明されることが多いが、『源氏物語』における人物呼称の場合、「朝廷の執政者」のように政治的権力と関わって説明されてきた。しかし、「大殿」にそうした意味があるならば、大臣職を辞した人物や、故人にも「大殿」が用いられるのは不審である。そこで本発表では、同じく大臣を指示することのできる「おとど」との比較によって、「大殿」の特徴を見出した。

まず、「大殿」と「おとど」の指示対象・修飾語の有無という観点から用例を検討した。その結果、邸第を指示できるか建物を指示できるかという点に差異が見られること、「おとど」はより多様な修飾語を伴うことができるが、官職関係の修飾語を伴う場合には両者が近似することを指摘した。

さらに、「大殿」がもつ意味について、個別の用例を取

り上げて検討した。その結果、「大殿」と「おとど」は文脈の政治性によって使い分けられているとは考え難く、むしろ家・一族に関わって使用されていることが判明した。また、政治性を指摘した従来の解釈は、修飾語がないことによって筆頭性を語用論的に獲得しているために生じたものではないか、という仮説を提示した。

最後に、「大殿」は大臣を輩出するような家・一族を前提とした呼称である、という本発表の主張に基づき、少女巻で「大殿」を冠して夕霧が指示される例を取り上げ、夕霧の属する一族が変化する過程を示した。このように、「大殿」は家・一族の問題として捉えられるべきであり、こうした観点から個別の場面や展開を再検討していく必要がある。

私家集としての

西本願寺本『在原業平朝臣集』

大阪大谷大学

荒井 洋樹

本発表では、はじめに『在原業平朝臣集』所収の五八首のうち、四一番歌から五二番歌の一二首を除いた四六首が基幹であるとする従来の見解が妥当であることを改めて確認した。

この基幹部分である四六首本の『業平集』は、『伊勢物語』の昔男像とは異なつた業平像を構築している。それは斎宮や二条の後といった女たちとの禁忌の恋を主題とするものではなく、現実的にあり得たかもしれない人生であつたと読み取つた。ただし、その人生も業平が実際にたどつたそれではなく、家集編纂者からみたかくあるべき人生であり、これもまた一つの虚像である。三代集入集歌を蒐集し、その歌人のかくあるべき家集を制作

するという点で光俊本『躬恒集』下巻と近似する。

基幹部分の内容を見ると、冒頭に「おほはらや」の歌を置き、高子および陽成に親近した業平像を描くが、後半では惟喬の出家を契機として沈淪し、地方を渡り歩き、最終的に死に至る旅路を描出する。一貫したテーマに基づいて編纂されるが、それは『伊勢物語』にあつた昔男像を知っているからこそ相違を理解し味読できるものと指摘した。

その一方で、『在原業平朝臣集』には典拠となつた三代集の詞書などをそのまま移植したがゆえに発生した不審点が存在する。むろん、それは早くから気づかれていたと思われ、東山御文庫本は西本願寺本系の本文を修訂したものであり、『在中将集』はさらに改編を加え、整序したものであらうと見通して発表の結びとした。

『落窪物語』の〈あこぎ〉と『鶯鶯伝』の
〈紅娘〉——侍女の活躍と継娘の復権に関する比
較文学的考察——

梅花女子大学(名)

三 木 雅 博

唐代伝奇『鶯鶯伝』は、『伊勢物語』「狩の使」章段の
原拠として早くから注目されているが、本発表では、『鶯
鶯伝』における、女主人公鶯鶯と男主人公張生との仲を
取り持つ侍女紅娘の活躍により男女主人公の恋愛が進展
していくという筋の展開が、恋愛を扱った唐代伝奇の中
でも注目すべき新しい手法であるという先学の指摘を承
けて、この侍女紅娘の存在や働きが、『伊勢物語』より後
に成立した〈継子いじめ〉を扱った『落窪物語』におい
て、継子落窪の姫君に仕え、彼女と貴公子道頼の仲を取
り持ち、虐げられた継娘の復権に奮闘する侍女あこぎに
反映されているのではないか、という指摘をまず行う。

次いで、現存最古のシンデレラ物語と言われる中唐の
段成式編『西陽雜俎』所収の「葉限」譚や、その後

にある東南アジアの〈継娘いじめ譚〉と、同じく〈継娘
いじめ譚〉である『落窪物語』とを比較対照し、アジア
に流布していた民話的な〈継娘いじめ譚〉を、平安朝当
時の宮廷社会を舞台にした現実的な物語に作り替えてい
くにあたり、虐げられた女主人公が貴種の男性と結ばれ
るために、民話の世界では非現実的な存在(「葉限」の
欲しいものが出てくる不思議な魚の骨、後世の『シンデ
レラ』の妖精など)の援助が必要となるところを、『落
窪物語』では現実的な存在に置き換えようとして、『鶯
鶯伝』の侍女紅娘の存在や働きに着目したのではないか、
という推論を提示する。

『大和物語』の親と子

関西大学（名）

山 本 登 朗

『大和物語』第四百七十七段の第一部は、『万葉集』にも詠まれている妻争い伝説を平安時代的な求婚物語に作り変えたものだが、そこでは、本来の形と違って、登場人物たちの親が登場し活躍している。その背景を探ると、『大和物語』には子が親とともに紹介され登場する章段が多いことが知られる。

まず注目されるのは、女性の登場人物が「くのむすめ」等という形で親の名などをことさらに示しつつ紹介される例が『大和物語』にはきわめて多いという事実である。同様の事情は、男性の登場人物の場合についても見られ、そこでは親の名だけが示され、登場人物本人は「くのむすこ」「の五郎」などという形で呼ばれていて名は示されていない。

また『大和物語』には、親子関係の変転を主題とする章段もいくつか見られる。その中の第五十四段では、源宗于の「三郎」が自ら他国に下る理由が「親はらからに

も憎まれければ」と述べられていて、『伊勢物語』の東下りと較べて、その差異が注目される。

よく知られた第四十五段の「人の親の」の歌については、田淵句美子氏の説の通り、『後撰集』詞書に記された詠作事情が本来の事実で、『大和物語』の内容は創作と考えられる。だとすれば『大和物語』前半部の実名章段にも創作された虚構が含まれていることになるが、他例も含め、その創作の主題のひとつは親と子のかかわりではなかったかと考えられる。第四百七十七段に親たちが登場する背景には、そのような『大和物語』全体の性格や主題の存在が考えられるのである。

令和七年十一月十五日(土) 於同志社大学

『源氏小鏡』は『源氏物語』をどの ように読んだか——語り手の言葉から見る——

同志社大学人文科学
研究所嘱託研究員

酒瀬川なおみ

『源氏物語』の梗概書には語り手とも呼ぶべき存在があり、『源氏物語』の登場人物の心情に寄り添ったり読者に想像を促したりする役割も担う。その言葉に注目することで、梗概書が『源氏物語』をどのように捉えているかが明らかになると考える。本発表では、代表的な『源氏物語』梗概書で、南北朝期から近世にかけて広く流布した『源氏小鏡』を取り上げ、その語り手が、『源氏物語』をどのように読んだのかを考察した。

まず、語り手の役割を「抄出・要約・注釈・鑑賞」に分類した。次に、語り手の「鑑賞」を、「感想・解説・読者への働きかけ・著者としての姿勢」の四つの観点に大

別し、それぞれの特徴を分析した。その結果、①『源氏小鏡』は要約にとどまらず、語り手が表出して感情を吐露し饒舌に『源氏物語』の内容を語る点、②語り手は物語展開や他作品との関係に関心を示し、とりわけ光源氏に関わる死や別れに注目する点、③『無名草子』などの中世における『源氏物語』評論書の考えを踏まえつつ自身の読みを示す点、④語り手は、『源氏小鏡』の読者として、『源氏物語』について一定の知識を持ち、将来『源氏物語』を教授する存在を想定している点が指摘できた。

今後は、当時の『源氏物語』評論や他の『源氏小鏡』伝本、また『源氏小鏡』の語彙の特徴などに注目することとで、さらに『源氏小鏡』の語り手の姿勢を深く分析していきたい。発表に際しては、様々なご意見を賜った。頂戴した内容も含め、『源氏小鏡』ひいては『源氏物語』梗概書のさらなる読みの深化を進めていきたい。

『海人の刈藻』巻四を読む

— 二人の新中納言を中心に —

同志社大学人文科学研究所
嘱託研究員（社外）

釜 丸 祥

中世の王朝物語には悲恋通世の型をもつ作品がまま見られる。『海人の刈藻』もそうした物語の一つであり、巻四において、主人公格の一人である新中納言は出家し、即身成仏を遂げる。しかし、物語はそこで終わらず、彼の息子で、同じく新中納言である人物【若君】を中心とする恋愛譚が少しばかり語られる。なぜ、『海人の刈藻』は主人公格の出家で物語を閉じなかったのか。そうした問題を解決するために、二人の新中納言に多用される「うらむ」関連語に注目しつつ、巻四を中心に読んでいきたい。

本物語において、「うらむ」関連語は計三十六例確認でき、それらは按察の大納言の三人の娘に求婚する三人の貴公子（権大納言・大将・新中納言）及び新中納言【若君】に偏って使用されている。

その上で用例を詳細に検するに、三人の貴公子の恋物語には「うらみ」の克服という「主題的」なものがあり、それが新中納言の恋愛譚に至って、「うらみ」に苦しみつつも「うらみ」を克服するという段階にまで高められていることが指摘できる。また、新中納言出家後の巻四後半部において、新中納言が自らの分身としての新中納言【若君】を「うらみ」による出家から救済し、ひいては大将をも子にまつわる「うらみ」から解放したということをも明らかにすることができる。

つまり、『海人の刈藻』は、新中納言が自身の「うらみ」を克服するのみならず、他者を「うらみ」から救い上げるほどの境地に到ったことを語っているものであり、そのためには、一件蛇足とも思える新中納言出家後の挿話が不可欠だったのである。

大沢本『源氏物語』（個人蔵）の 成立過程

（発表時の題目に不備があったため一部訂正した）

総合研究大学院大学（院）

瀧山 嵐

大沢本『源氏物語』（個人蔵。鎌倉く室町末頃写、全五四冊揃、取り合わせ本）に関する体系的な研究成果として、二〇一六年に伊井春樹『大沢本源氏物語の伝来と本文の読みの世界』（おうふう）が上梓されたが、その後、大沢本に関する研究は展開していない。本発表では、大沢本に付属する鑑定資料の分析、および書誌的観点から大沢本の成立過程につき再検証し、報告した。

まず、大沢本に付属する古筆了栄と古筆了仲の鑑定資料（計一六巻分）の性格を検討した。了栄が鑑定した伝三条公敦筆「紅葉賀」巻を対象として、公敦を書写者として伝える諸資料との比較検討を行ない、了栄の鑑定水準について検討した。

他方、了仲が鑑定した「藤裏葉」・「横笛」巻の鑑定資料について、署名箇所捺された印について検証した。

通常、署名箇所には折紙極印「釣玄斎」印を捺すが、大沢本では、本来ならば代附証に捺される「忍」印が存し、鑑定資料としての不審点を指摘した。これらの検証に基づき、古筆見の鑑定資料それ自体と、鑑定結果とに関する再検証が喫緊の課題であることを提示した。

さらに、大沢本の和歌の書式方法に関する悉皆的調査に基づき、成立過程との関連を考証した。具体的には、「桐壺」・「花宴」・「明石」・「藤裏葉」巻の和歌の書記方法について、書誌的観点から行数・改行・字下げ・地の文への連接方法を検討し、特に行数と字下げに基づく写本分類が、取り合せ本の成立過程の解明に有効な方法であることを提示した。

中古文学会関西西部会例会記録

(所属は発表時のものである)

第四十九回例会 平成三十年六月九日

(於 同志社大学)

『源氏物語』における青海波―記憶の中の光源氏―

龍谷大学 (院) 藤井 華子

『源氏物語』贈答・唱和歌考

―朝顔巻巻末における紫上と光源氏の歌解釈を中心に―

大阪府立大学 (院) 小西 美来

三条西公条の伊勢物語注釈

上智大学 本廣 陽子

第五十回例会 平成三十年九月八日

(於 京都女子大学)

『源氏物語』における目・耳をとどめる行為

―光源氏と女君たちを中心に―

大阪大学 (院) 北島 紬

『源氏物語』における「孝」の方法

―「孝」の用例を起点として―

香川高等専門学校 森 あかね

第五十一回例会 平成三十年十一月十七日

(於 関西大学)

曇華院蔵『なよ竹物語絵巻』の詞書筆者とその周辺

大阪工業大学 横山 恵理

宗祇の源氏学における『花鳥余情抄出』の位置付け

奈良大学 松本 大

鎌倉時代の伊勢物語享受

―鉄心斎文庫本伝二条為氏筆伊勢物語の注記が語るもの―

関西大学 山本 登朗

第五十二回例会 令和元年六月八日

(於 大阪大谷大学)

『弄花抄』における『一葉抄』の引用状況

―『河海抄』享受の様相―

広島大学 (院) 渡橋 恭子

『源氏物語』贈答歌から見る紫の上の人物造型

同志社大学 (院) 風岡むつみ

「あふ」と「ぬ」―伊勢物語六三段から―

梅花女子大学 (名) 中川 正美

第五十三回例会 令和元年九月七日

(於 京都先端科学大学)
『源氏物語』における琵琶を弾く女君の造型と漢文学
— 明石の御方を中心に —

立命館大学 (院) 劉 安琪
『和漢朗詠集』古注釈をめぐって
京都大学 (院) 宮武 衛

『大和物語』の「となむありける」— 〈歌物語〉の生成 —
日本語日本文学研究 山下 太郎

第五十四回例会 令和元年十一月十六日

(於 奈良女子大学)
手習巻の浮舟に対する「うつくし」「うつくしげなり」
— 失踪という物語の転換点とに関わりに着目して —

文体を一新する—戦後の国文学者たちと谷崎源氏の交渉—
上智大学 (院) 藤田 亜美
同志社女子大学 大津 直子
「源氏物語」を「復元」するという試行錯誤
実践女子大学 横井 孝

第五十五回例会 中止 第五十六回例会 中止

第五十七回例会 令和二年十一月七日

(オンライン開催 (開催協力校 京都女子大学))
『雨夜談抄』の位置づけ—注釈姿勢は何故変化したのか—

大阪大学 (院) 川渕 紗佳
深川本狭衣物語 (巻二) 起筆部本文の再検討
大阪大学 (院) 小林 理正

第五十八回例会 令和三年六月十二日

(オンライン開催 (開催協力校 京都女子大学))
『源氏物語』夕顔巻の「蟬の羽」の歌について
— 『後撰集』の「うつせみのから」より「夏衣」へ —

京都女子大学 (研) 朝日眞美子
涉成園の偶仙楼をめぐって
立命館大学 川崎佐知子

第五十九回例会 令和三年九月四日

(オンライン開催 (開催協力校 天理大学))
『小夜衣』における「はればれし」の機能について
同志社大学 (院) 釜丸 祥

『源氏物語』鈴虫巻の不審本文「かの三条の宮」
大阪大学 (院) 飯田 実花

第六十回例会 令和三年十一月二十七日

（オンライン開催（開催協力校 立命館大学）
嘉保二年八月十二日の堀河天皇内裏の時空

—『讃岐典侍日記』の『源氏物語』受容から—

愛知工科大学（非） 牧野 裕子

清輔本勅撰集の勘物と私家集—三代集以後を中心に—

実践女子大学 舟見 一哉

『夜の寝覚』欠巻部・既存部の新出断簡

実践女子大学文芸資料研究所（客） 横井 孝

第六十一回例会 令和四年六月四日

（於 関西大学（ハイブリッド開催）

室町中期における『源氏物語』の注釈態度

—第三部の呼称不審に着目して—

大阪大学（院）・日本学術振興会特別研究員 川淵 紗佳

『在明の別』の構造についての一考察

—『源氏物語』変奏を中心に—

広島女学院大学 小松明日佳

『うつほ物語』前田本系統本文再考

天理大学附属天理図書館 高橋 諒

第六十二回例会 令和四年九月十日

（オンライン開催（開催協力校 奈良女子大学）
『源氏物語』における後院での成人儀礼について

—女三宮・薫を中心に—

東京大学（院） 宮内 理伽

『うつほ物語』の構造—「三条」に着目して—

大阪大学（院）・日本学術振興会特別研究員 飯田 実花

『とはずがたり』という作品名

—明石巻に学んだ「琵琶行」の「自言」—

京都女子大学（院） 北條 暁子

第六十三回例会 令和四年十二月十日

（於 同志社大学）

『源氏小鏡』諸本分類再考

同志社大学（院） 酒瀬川なおみ

『夜の寝覚』第一部の構想

—男君の「率る／隠す」を端緒として—

立命館大学（院） 石橋 孝

『萬水一露』の成立過程の再検討

—陽明文庫蔵『源氏物語註』の紹介をかねて—

関西大学 松本 大

第六十四回例会 令和五年六月十日

(於 大阪大学)

物語、その「性」を問う「散逸」と「改作」を軸にして―

天理大学 原 豊二

源師房の才学・文事

神戸女子大学 北山 円正

第六十五回例会 令和五年九月二日

(於 京都先端科学大学)

ピーター・J・マクミラン氏講演会・座談会(一般公開)

心ときめく古典の世界―外国人から見た日本古典文学―

(第一部) 講演会

講師 翻訳家・版画家・詩人 ピーター・J・マクミラン

講師紹介

関西大学名誉教授 山本 登朗

(第二部) 座談会

司会

京都先端科学大学 山本 淳子

登壇者

講演会講師 ピーター・J・マクミラン

同志社中学・高等学校教諭 酒瀬川なおみ

京都府立朱雀高等学校校定時制教諭 釜丸 祥

洛星中学・高等学校非常勤講師 石橋 孝

立命館大学(院) 石谷詩穂里

立命館大学四回生 大学院進学プログラム 石垣 梨紗

第六十六回例会 令和五年十一月二十五日

(於 神戸女子大学)

「陽成院歌合(惜秋意)」における恋歌的表現

広島大学(院) 顧 宇豪

『うつほ物語』 本文考

― 流布本・浜田本・木曾本系統をめぐって―

天理大学附属天理図書館 高橋 諒

第六十七回例会 令和六年六月二十二日

(於 大阪工業大学)

室町後期の寄合書き『源氏物語』の成立背景

総合研究大学院大学(院) 日本学術振興会特別研究員 瀧山 嵐

『更級日記』後半の物語記事はどの程度の独自性を有するか

高知大学 大塚 誠也

第六十八回例会 令和六年九月十四日

(於 立命館大学)

『浜松中納言物語』 吉野の姫君の病

立命館大学(院) 石垣 梨紗

飛鳥井女君物語における「あやし」の同語反復表現

― 『源氏物語』からの系譜―

上智大学(院) 藤田 亜美

第六十九回例会 令和六年十一月三十日

(於 四天王寺大学)

『源氏物語』における友情と隠し事

—「隠す」光源氏と「暴く」頭中将—

立命館大学(院) 大栢 夕依

伝寂然筆村雲切『貫之集』の再検討

関西大学(非) 北井佑実子

平安文学における服飾描写の西洋諸語への翻訳と

服飾文化の伝達の可能性について

早稲田大学高等研究所 フィットレル・アーロン

第七十回例会 令和七年六月七日

(於 奈良教育大学)

伝後水尾天皇筆大和物語切の本文について

関西大学(院) 梶谷 侑希

『源氏物語』における「大殿」

—「おとど」との比較をとおして—

大阪大学(院) 飯田 実花

第七十一回例会 令和七年九月六日

(於 関西大学)

私家集としての西本願寺本『在原業平朝臣集』

大阪大谷大学 荒井 洋樹

『落窪物語』の〈あこき〉と『鶯鶯伝』の〈紅娘〉

—侍女の活躍と継娘の復権に関する比較文学的考察—

梅花女子大学(名) 三木 雅博

『大和物語』の親と子

関西大学(名) 山本 登朗

第七十二回例会 令和七年十一月十五日

(於 同志社大学)

『源氏小鏡』は『源氏物語』をどのように読んだか

—語り手の言葉から見る—

同志社大学人文科学研究所嘱託研究員 酒瀬川なおみ

『海人の刈藻』巻四を読む—二人の新中納言を中心に—

同志社大学人文科学研究所嘱託研究員(社外)

釜丸 祥

大沢本『源氏物語』(個人蔵)の成立過程

(発表時の題目に不備があったため一部訂正した)

総合研究大学院大学(院) 瀧山 嵐

中古文学会関西西部会規約

(名 称)

- 一、本会の名称を中古文学会関西西部会（以下、「本部会」という。）とする。

(部 員)

- 二、本部会は左記の条件を満たす部会員によって構成する。

- 1 近畿二府四県（大阪・京都・兵庫・奈良・滋賀・和歌山）に現住所もしくは勤務先を持ち、本部会への入会を希望する中古文学会会員。

- 2 1に該当しないが、本部会の趣旨に賛同し、特に入会を希望する中古文学会会員。

(事 業)

- 三、本部会は、左の事業を行なう。

- 1 研究発表会（原則として年三回）

- 2 会報の発行（原則として隔年に一回）

(運 営 委 員 会)

- 四、本部会の運営のために運営委員会を置く。

- 1 運営委員会は、関西地区在住の左記委員により構成する。

甲 本部会の会員となった中古文学会委員。

乙 甲によって組織された運営委員会において、委員として推薦された部会員。

- 2 運営委員会は、部会事務局の代表者が研究発表会の日に招集し、その代表者が議長となる。

(部 会 事 務 局)

- 五、本部会を運営するために部会事務局を置く。

- 1 部会事務局は運営委員会が委嘱する。

- 2 部会事務局の代表者をもって本部会の代表者とする。

- 3 部会事務局は本部会の事業を統括し会計を管理する。

- 4 部会事務局は年度末に本部会の活動内容を中古文学会に報告しなければならない。

- 5 部会事務局は『中古文学』の発行毎に、本部会の活動報告を中古文学会に送付しなければならない。

- 6 部会事務局の任期は二年とする。

(部 会 費)

- 六、本部会の事業遂行のために部会費を徴収する。

- 1 部会費は、年間二千円とする。ただし、学生は千円とする。

- 2 部会費の納入を三年間怠った場合、退会と見なす。

(規 約 の 改 正)

- 七、本規約を改正する場合は、運営委員会の議を経て部会員に告知しなければならない。

(附 則)

- 1 本規約は平成十四年四月一日から施行する。

- 2 本規約は平成二十五年四月一日から改正施行する。

後記

会報二十三号をお届けいたします。

本年度も例年どおり、三回の例会を開催することができました。発表者をはじめ、司会者、そして席上およびその後にも活発に議論を交わしてくださった皆様、厚く御礼申し上げます。また、ご多忙にも関わらず、会場校として労をお取りくださった関係各位にも感謝いたします。

一時期は発表者の確保に苦慮し、例会の回数を減らすという方向性をも視野に入れて検討されたということも耳にしております。ですが今年は、そのような懸念は払拭された一年でした。前号の第二十二号会報の後記（原豊二氏執筆）には、関西部会の今後について「大学院生の発表について会員皆で育てるような気持ちがあつてよいのではないか」という意見が紹介されていますが、それが早くも、若手研究者のご発表が目立つという今年の例会に反映されたのかもしれない。研究の入口に立つたばかりの若手が、学問・研究の厳しさを実感しつつも、「研究発表をやってみよう！」という積極的な気持ちになれる場として、今後も関西部会が活動していくことを願ってやみません。

また、事務局側としても、今後を考え、既発行分の

関西部会会報（「関西平安文学会会報」第一～七号を含む）の在庫を中古文学会秋季大会フリースペースにて配布し、身軽になるとともに、第二十三号部会会報から中文学会HPに掲載する方向で準備を進めています。より広く関西部会の活動を知っていただくきっかけになれば幸いです。

なお、令和八年度の事務局は、京都大学の金光桂子氏にお引き受けいただくことになっています。今後とも変わらぬご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

（福田）

中古文学会関西部会会報 第二十三号

令和八年三月三十一日発行

編集・発行者

中古文学会関西部会事務局

〒六一〇—〇三九四

京都府京田辺市多々良都谷一—三

同志社大学 文化情報学部 福田智子研究室内

ホームページ

<http://chukobungakukai.org/bukai.html>

印刷所 和泉書院